

デンマークにおける教育改革後の体育と身体活動に関する研究

A Study on Physical Education and Physical Activity after Educational Reform in Denmark

柴田 卓*

SUGURU Shibata

This study visited two national schools to conduct a survey on the practice of physical education and physical activity after the Danish educational reform was implemented in 2014. The following five points were clarified from the on-site visit and interview survey. First, it was found that interest in physical education and healthiness has increased more than before, such as conducting physical education classes jointly in classes to increase children's motivation and incorporating physical education in graduation exams. Second, it was found that general subjects other than physical education intentionally incorporate exercise and physical activity. Thirdly, it was found that the physical activity performed in this general subject is a new concept called Brain Breaks. Fourth, the two schools shared the lesson with the outdoor environment and encouraged children to go outdoors during their breaks. Fifth, we found that various organizations, companies, and research projects support teachers in the field by developing teaching materials and activities to promote and implement this reform.

1. はじめに

デンマーク、フィンランド、スウェーデンの教育・保育の調査をはじめて10年余りが経過した。社会情勢の変化に伴い、起業家精神教育⁽¹⁾やモチベーション教育をはじめ、いくつかの興味深いキーワードに遭遇し、教育・保育もこの10年間で大きな変革期を迎えている。本稿で取り上げるデンマークにおいても2014年に主に授業時間数を増やす、学校の滞在時間を長くする、多様な学校生活と教育を用意するなどの教育改革が実施されている⁽²⁾。これら教育改革における一連の流れについては、谷(2014)が詳細に考察しているので、本稿はその一部を紹介する。今回の教育改革の背景には、2000年に実施されたPISAの結果が影響している。数学的リテラシーは平均以上であったものの、読解力と科学的リテラシーは平均点以下であった⁽³⁾。この結果に対してデンマーク政府は様々な施策⁽⁴⁾を行ってきたが、2012年の結果においても大きな改善がなされず、OECDの平均値前後にとどまっている。こうした背景が今回の

* 幼児教育学科

改革において授業時間数と学校滞在時間の増加⁽⁵⁾に踏み切る要因となっている。

一方、改革のもう一つの側面である多様な学校生活(統合された学校生活)の実現に関しては、学校側に自由裁量があり、学校の状況に合わせて実施することが可能となっている。例えば基礎教育のテーマに沿ったプロジェクト活動や身体活動等の「補足的授業」⁽⁶⁾、宿題支援などの「学習補助」や「教科集中訓練」である。これらを0～3年生は80時間、4～6年生は120時間、7～9年生は80時間の範囲で設定することができ、その活動は放課後も含まれている。さらに、学校生活の中で1日に45分の身体活動を実施することが義務付けられている。この身体活動に関しては特に重点が置かれ、休み時間における運動の推奨や体育以外の一般的な教科において身体活動の要素が組み込まれるなど、様々な形で実践が始まっている。注目すべきは、身体活動が学習成果や幸福感に良い影響を及ぼすという研究成果⁽⁷⁾を積極的に取り入れようとする考えが全国的に浸透している点にある。このことはデンマークをはじめとする北欧諸国に限らず、世界的な関心事といえる。その要因の1つとして、世界保健機構(WHO)が1日に1時間の運動を推奨⁽⁸⁾しており、デンマーク国立健康管理局(Sundhedsstyrelsen)⁽⁹⁾も同様に1日1時間の身体活動を推奨しているのだが、11～15歳の大多数が達成できていないと警鐘を鳴らしており、身体活動や健康面に関する成果が上がっていないとの指摘も散見される。

このような背景から、本稿は2014年にデンマークで実施された教育改革に対し、とりわけ調査報告の少ない体育と身体活動に焦点を当て、改革後に実施した取り組みや、その取り組みからどのような変化がもたらされたのか等について、現地調査及び体育教師へのインタビュー調査から実証的に明らかにすることを目的とした。

2. 調査の方法

本研究における調査は、デンマーク国内の2つの国民学校で実施した。この2校は、デンマーク国立評価機関(EVA)⁽¹⁰⁾が2014年に発行した教育改革に向けた広報雑誌インスピレーションカタログ(Inspirationskatalog Fra skole til skole)⁽¹¹⁾をもとに選定した。同雑誌の中で、身体活動と運動に関する部門で既に優れた実践を行っている国民学校が9校紹介されており、この9校から本研究に対して協力の承諾を得る事ができたのが以下に示す2校である。調査に関しては、コーディネーターを通してあらかじめ調査内容を説明し、現地担当教員より調査の趣旨に合った視察プログラムの提供を受けた。視察当日は研究に関する承諾と写真の取り扱いに関する確認を行った上で実施し、質問に関しては半構造化面接法を用いた。現地語でのインタビューを実施するため、通訳を大野氏に依頼した。本稿は各学校の教育改革後における体育および身体活動に関する取り組みと、体育教師に対するインタビュー結果を報告し、考察を加え

ながら論考する。

スケジュールと調査内容

調査①：2019年8月29日(木) アスゴー国民学校 (Asgård Skole)

対象者：体育教員 ステファン・デメル・エムボー (Stefan Demmel Emborg)

調査内容：3年生の体育, 5年生の歴史, 1年生の国語, インタビュー調査

調査②：2019年9月2日(月) ノア・フェレ国民学校 (Nørre Fælled Skole)

対象者：副校長・体育教員 ニコライ・モーテンセン (Nicolaj Mortensen)

調査内容：高学年体育コース, 身体活を促す教材および環境構成, インタビュー調査

インタビュー内容：変革後の体育・身体活動における実践とその効果について

コーディネート：澤渡夏代ブランド (Natsuyo Sawado Brandt)

通訳：大野睦子ビューアソー (Mutsuko Ono Bjerresø)

3. 調査結果

3-1 アスゴー国民学校 (Asgård Skole)

アスゴー国民学校は、首都コペンハーゲンから南西約30キロに位置するケーエ市 (KØGE KOMMUNE) にある。在籍数は0学年から9年生まで558名である。教員数は非常勤も併せて45名であり、その内体育の教員は8名である。本調査に協力してくれたのは、ステファン・デメル・エムボー (Stefan Demmel Emborg) 氏である (以下エムボー氏)。エムボー氏は、体育教員の中でも指導的立場にある運動指導員であり、他の体育教員に対し必要に応じて助言を行うという。ケーエ市には12の国民学校があり、彼のような運動指導員が7名いるという。冒頭でも触れたようにアスゴー国民学校でも7年生から9年生の運動不足が課題となっており、高学年の体育授業や身体活動に関する児童のモチベーションを上げることが難しく、授業内容や展開方法についてエムボー氏へ相談する教員が多いという。そこで、外遊びと身体活動を促す学校独自の取り組みとして、0学年から6学年までの児童に対し、休み時間には必ず外に出なければならないというルールを設けているという。

デンマークの校舎や校庭の構造は様々であるが、アスゴー国民学校の校庭には3つのバスケットボール兼サッカーコートがあり、概ね低学年(0～3年生)、中学年(4～6年生)、高学年(7～9年生)で使い分けている。そのコートや通路には国語や算数などの時間に使用する数字や文字などのフレーム(図1～3)がプリントされ、屋外での学習や身体活動を促す工夫が見られた。これらは、主に民間のスポーツを推奨する団体がアクティビティを開発し提供

しているものである。その他に広大な芝生の広場(図4)やグラウンド、低学年用の遊び場と遊具(図5)、ビオトープ(図6~8)と植物園(図9)などがあり、ファイヤースペース(図10)も2か所設置されている。校舎には、2つの体育館とボクシングジム(図11)があり、選択制で4~5年生の体育の一環としてボクシングを実施しているという。また、学外の時間帯に地域のボクシングクラブが練習で利用したり、学童クラブでも利用されたりしている。また、市内の学校対抗のスポーツ大会から全国レベルの大会まで開催されており、バレーボールやサッカー、陸上競技など様々な種目で競い合っている(図12)。

体育の授業に関しては、0~6年生が週に2回、7~9年生が週に3回である。このほかに4~6年生は水泳の授業があるため体育の授業数が多くなっている。7~9年生が週に3回あるのは、教育改革後に卒業試験に体育が組み込まれ、卒業試験に向けて教科内容を充実させるためである。



図1. 屋外のフレーム(数字)

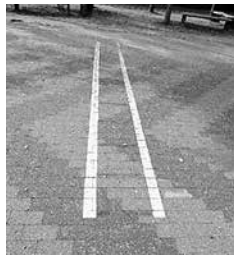


図2. 屋外のフレーム



図3. 屋外のフレーム(文字)



図4. 広大な芝生の広場



図5. 低学年用の遊び場



図6. ため池



図7. ため池からの水路



図8. ビオトープ



図9. 植物園



図10. ファイヤースペース



図11. ボクシングジム



図12. 学校対抗スポーツ大会

はじめに視察したのは、3年生の体育の授業である。この日の授業内容は陸上競技である。体育館で待っていると、3クラスの児童が集合し合同で授業が開始された。アスゴー国民学校では、改革前にはクラス単位で体育の授業を行っていたが、改革後は1～3年生が3クラス合同、4年生以上は2クラス合同で授業を行っている。その理由として、合同にすることで3名の体育教員が協働しながら授業を展開できる点にある。2時間連続の授業においては、3名の体育教員がいることで多数の種目を行うことができ、子ども達も飽きずに集中することができるという。この日は、担当教員が本時の説明を行った後、ウォーミングアップとして手つなぎ鬼がはじまった。手つなぎ鬼は、鬼が4人になると分裂して増える日本と同様のルールであった。その後、次に実施する種目の説明を行い、屋外へ移動した。屋外では、クラス単位で60メートル走(図13)、ボール投げ(図14)、走り幅跳び(図15)が行われ、ローテーションしながら2時間の中で3種目の測定が行われた。



図13. 60メートル走の様子



図14. ボール投げの様子



図15. 走り幅跳びの様子

次に視察したのは、体育館で実施された5年生の歴史の授業である。授業内容は、これまでに学習した歴史上の出来事に関する復習であり、意図して体育館で実施するとのことである。歴史の授業の中にも身体活動の要素を取り入れることで、子ども達の学習意欲と学習成果の向上を目的とした授業である。はじめに、担当の子ども達がビッグバーンやホモサピエンスなどが描かれたカードを対面する壁側に並べる(図16)。教師が事前に説明した内容の確認(図17)を終えると、スタートの合図で4つのグループが二人組で一斉にスタートした。一人は荷台に乗りもう一人は荷台の児童を押しカードを拾い集めるという障害物競争のようなレース(図

18) であるが、誰一人笑うことなく真剣である。集めたカードは自分のチームの前に並べて交代である。荷台に乗っていることから遊びの要素もあるが、ある程度のスピードもあり、危なさや緊張感もあった。どのグループも概ね7枚程度のカードを集めたところで教員がストップさせ、児童に対し「このまま続けるとどうなる」と質問した。子ども達の中から「だらけてきて危ない」という答えがあり、荷台を使つてのレースから股の間にボールを通すレース(図19)に変更された。15枚程度のカードが集まるとレースが終了し、グループで集めたカード(図20)を議論しながら古い順番に並べ直した。数分後、グループから一人ずつ児童がカードを教員の前に並べ、答え合わせ(図21)が行われた。ヴァイキング時代はデンマークにとって重要な意味を持つと教師がまとめ、授業が終了した。

この授業を概観すると、歴史に興味を示さない児童にとって、身体活動を伴うグループ活動を取り入れることで、参加の機会が必然的に保証され積極的に取り組むことができていた。運動が得意な子、歴史が得意な子、他のグループの様子を探る子など、グループの中でも役割分担が行われ、グループとしての協働性を発揮する場面が見られた。日本において歴史の授業は、教室で行われるのが一般的であるが、本授業は教科に身体活動を統合させるための工夫と努力が見られた実践と言える。こうした身体活動を伴うゲーム性のある授業は、体育館に限らず校庭や広場でも実施されており、日本においても十分に応用できる実践と言える。



図16. カードを並べる様子



図17. スタート直前の確認



図18. レースの様子



図19. 股下にボールを通すレース



図20. カードの並べ替え



図21. 答え合わせの様子

次に視察したのは、在籍数24名の1年生の国語の授業である。この日は、動物や人間の部位、動作などが描かれたプリントに色を塗りながら数字やアルファベットを理解する授業である。

一通り、塗り絵が終わった後、子ども達が中央に集まり(図22)、教師のかけ声に合わせて身体活動を伴う遊びがはじまった。教師が「肘と肘」といえば、二人組の子ども達が肘と肘をつけるとい内容である。オデコとオデコ、おしりとおしり、肩と肩など塗り絵に出てきた部位をくっつける遊びであり、子ども達は楽しそうに実施していた。その後、誕生日の児童が前に呼ばれ中央の黒板に背を向けて立ち、他の児童は四隅に移動した。四隅はそれぞれ1～4に番号が割り当てられ、中央の子どもが2と言えば、2番にいた児童たちは席に戻るという遊び(図23)である。教師が「24名中2番にいたのは4人だから残りは20名」と解説しながらゲームが数回続き、残り5名くらいのところまで終了した。



図22. 文字を活用した身体遊び 図23. 数字を活用した身体遊び 図24. 遊びを促すパトロール隊

この授業を概観すると、はじめに塗り絵のようなペーパーで文字や数字に親しみ、そこで取り上げた文字や数字を活用した遊びが教室内で展開されていた。ゆったりとした雰囲気の中でほどよく身体活動が取り入れられており、児童も楽しそうに学んでいる様子が見られた。こうした授業のほかに、屋外にプリントされたフレームを活用して韻を踏む国語の遊びや数字と親しむ遊びが行われているという。

アスゴー国民学校では、もう一つユニークな取り組みが行われていた。それは、講習を受けた上級生の児童が下級生に対して、学校生活での安全面や外遊び、身体活動を伴う遊びを促すために、パトロール隊(図24)が組織されているのである。上級生が下級生に遊びを促したり、ロールモデルとして機能させたりしていくこの仕組みは、デンマークらしい取り組みであり、前述したインスピレーションカタログでも紹介された優れた実践の一つである。

次に、エムボー氏へのインタビュー結果である。

柴田：体育教師という立場から、デンマークの教育改革は良い方向に向いたのでしょうか？

エムボー氏：率直に言うと良くなったと考えています。特に運動の質が向上し、子ども達も意欲的に運動に取り組むようになったと思います。その背景には、改革後に統一して音楽は音楽専門の教員、体育は体育専門の教員が指導するようになったことが影響していると思います。

柴田：改革前と後で大きく異なる点は何ですか？

エムボー氏：やはり1日に45分間の身体活動を取り入れることに対して、どうやって身体活動を取り入れたら良いのかわからないなど、はじめは担任や授業担当者たちが反対しました。しかし、いざ身体活動を取り入れて試行錯誤を繰り返していくうちに違和感がなくなっていきました。そして、授業に集中して疲れている児童に対し、ちょっとした運動を取り入れることで脳が休息し、集中力が増すことを教師も子ども達も実感するようになり、これらの取り組みに利益があると気づきはじめてのです。教師たちも様々な研修会に参加して、自分にとって利用できるものを集め、自分に合うものを選択しながら実践してきた成果でもあります。さらに、勉強が苦手な子ども達が、授業に対して積極的になり、楽しそうに参加するようになりました。校庭を授業で活用したり、iPadを活用したオリエンテーリングを実施したりと、指導方法に関するバリエーションが確実に増えたと思います。

また、体育の授業に関しては、改革前は9年生で実施される国民学校の卒業試験に体育は組み込まれていませんでした。しかし、改革後から組み込まれるようになりました。その内容は筆記試験のほかに、陸上競技やダンス、器械体操、ボールゲーム、筋力トレーニングなどの実技から2つを抽選で決め、グループで試験に取り組むという内容です。2つの課題に取り組みますが、どの課題になるかは試験間近にならないとわからないのです。これも高学年の体育や身体活動の学習意欲を向上させるための一貫です。こうした各学校の取り組みについて、運動指導員が集まる研修会を開催して、体育や身体活動等に関する情報を共有する機会を定期的に行う予定であるとエムボー氏は語った。



図25. エムボー氏と筆者

3-2 ノア・フェレ国民学校(Nørre Fælled Skole)

ノア・フェレ国民学校は、首都コペンハーゲン市(København)にあり、494名が在籍する学校である。この学校は、スポーツに特化しており、日本の中学生にあたる7年生から9年生にかけて1クラス28名のスポーツクラスが設置されている。10名在籍する体育教員の他に、6名の優秀な専門指導者(コーチ)がスポーツクラスの指導を担っているという。こうしたスポーツに特化した学校はデンマークに10校あり、コペンハーゲンには5つの学校があるという。本調査に協力してくれたのは、副校長兼体育教師であり、エムボー氏同様運動指導員という立場のニコライ・モーテンセン(Nicolaj Mortensen)氏である(以下モーテンセン氏)。モーテンセン氏との待ち合わせ場所が、学校ではなくコペンハーゲン市内のスタジアム前であり困惑したが、本時のスポーツクラスの授業がこのスタジアムとその周辺で行われていると聞いて納得した。



図26. 屋内陸上競技場



図27. スタジアムの体育館



図28. 隣接するサッカーコート



図29. 学校の正面



図30. 屋外で遊ぶ子ども達



図31. フレームを活用した遊び

はじめに、ノア・フェレ国民学校のスポーツクラスについての概要である。

このスポーツクラスは、陸上、サッカー、ベーシック（その他の種目）に分かれて実施され、1つのクラスを種目で横割りされた9名程度の授業と、7年生から9年生を種目で縦割りした27名程度の授業が展開されている。視察した日は、学校から300メートルほど離れた地元の陸上クラブが運営する屋内陸上競技場（図26）で陸上クラス、市が運営するスタジアム（図27）でベーシッククラス、隣接する公園のサッカーコート（図28）でサッカークラスの授業が行われていた。陸上クラスでは、7年生から9年生の縦割りで27名が、生活や練習のプランニング方法について、対話形式で授業が展開されていた。特筆すべきは、指導していたのが体育教師ではなく外部講師であり、各種目の一流コーチということである。サッカーのコーチは国内女子サッカーでトップリーグのコーチであり、ベーシックのコーチは国外でテコンドウのナショナルチームのコーチを務めた経験があるという。こうした優秀な6名のコーチが、週に9時間の指導を行うという。コーチに支払われる予算は、教材費を含めコペンハーゲン市から120万デンマーククローネ（日本円で約1,900万円）が予算化されているという。従って、モーテンセン氏が説明したように地元のスポーツクラブより専門的で質の高い指導を受けることができ、このことも人気を集める鍵となっている様である。そのため、7年生からこの28名定員のスポーツコースに入学を希望する生徒は毎年80名ほどになり、実技と面接を行って入学者を決めているという。



図32. サッカーコート



図33. 低学年用の遊び場



図34. 校内に貼られたQRコード



図35. 体育館



図36. トレーニングマシン



図37. 学習センター

ノア・フェレ国民学校がスポーツに特化したのは2012年からである。それ以前はその当時の社会情勢も相まって教育の質が著しく低下したという。この頃から、富裕層がプライベートスクールへ転校するなどして、生徒数が一時160名まで減少したという。廃校が危ぶまれ、学校の立て直しを目的にスポーツに特化することが決まり、スポーツに特化した他の国民学校に勤務していたモーテンセン氏らが着任したという。着任後、学校全体の改革を行い、学校名も当時のクロスターヴェンゲ・ヘーレダイス国民学校 (Klostervænge Heldags Skole) から現在の Nørre Fælled Skoleへ変更し、学校のロゴもスポーツをモチーフ (図29) に一新したという。その後、徐々に生徒が集まるようになり現在に至っているという。こうした背景もあり、2014年の教育改革はこの学校にとっても良い影響をもたらしたとモーテンセン氏は語った。

校内については、コペンハーゲン市内ということもあり、前述のアスゴー国民学校ほど広大な敷地ではないが、身体活動や外遊びを促す工夫が多数見られた。中央の広場 (図30、31) にはバスケットボールのコートがあり、アスゴー国民学校と同様にチョーク等でプリントされたアクティビティ用のフレームがアスファルトの地面に多数ある。隣には芝生のサッカーコート (図32) があり、その向かい側には低学年用の遊び場 (図33) がある。この遊び場は身体活動を促すために日本でいうところの理学療法士と相談しながら遊具の設計と配置を行ったという。また、屋外のいたるところに学年が記されたQRコード (図34) が掲示されており、iPadで読み取りながら国語、社会、理科などの教科で課題を解決するオリエンテーリングのような授業が展開されているという。これもまた、屋外環境を活用してモチベーションと身体活動を高める実践の一例である。校舎の中は、体育館 (図35) が2つあり、その隣には本格的なトレーニン

グマシーンが完備(図36)され、高学年の授業で使用されているという。次に校内の図書館を紹介していただいたが、奥には自習に取り組むスペースが設けられ、ここでは学習センター(図37)と呼んでいる。この学習センターでは宿題カフェという取り組みが実施されており、赤十字から各教科の学習支援員が派遣され、宿題や自習をサポートしているという。



図38. 給食室



図39. 1年生の授業風景



図40. 教材の棚



図41. アクティビティファイル



図42. ファイルの内容



図43. 教科に関連した教材

給食に関しては、日本の様に必須ではなく、希望者にのみ対応している。ケータリングを使用する学校が多い中、ノア・フェレ国民学校では給食専門のスタッフが在籍し出来立ての食事を提供している。独自の取り組みとして、給食スタッフと教師との共同で健康教育が実践されている。デンマークにおいてもファーストフードや偏食、肥満が問題となっており、子どもや保護者に食事の重要性について伝えるワークショップを行っている。その際、この給食室(図38)が使用され、定期的に料理教室を開催している。スポーツクラスの保護者には、スポーツ栄養学についての講義もあるという。

次に、1年生のクラス(図39)を見学したが、教室の出口に棚(図40)が設置され、教材が整理されていた。中には、各教科のアクティビティファイルと身体活動用のアクティビティファイル(図41、42)、それぞれのアクティビティに関連した教材(図43)がクリアボックスに収納されていた。基本的に授業内容は担当教師が考案するのだが、教育改革当時は企業や団体が開発したこれらの教材から多くのインスピレーションを得たという。

続いて、モーテンセン氏へのインタビュー結果である。

柴田：体育教師の立場から、デンマークの教育改革は良い方向に向いたのでしょうか？

モーテンセン氏：はじめは、学校に滞在する時間が長くなり、低学年にとってはあまり良いことではないと思っていました。しかし、新たに改定⁽¹²⁾があり、0年生から3年生にかけては週35時間から33時間に短縮され、懸念は解消されました。体育の観点からは、縄跳びやボールなどに加え教科内容や教授方法を考える上で参考となる教材に対しての予算がつき、改革を実現するための準備ができました。校内で運動や身体活動を定着させるには時間がかかりますが、この改革後は比較的早い段階で遊びや身体活動の質が高まり、外遊びの時間も長くなったと実感しています。また、国語や算数などの教科にも身体活動を取り入れることになりましたが、本校には改革前から身体活動を授業に取り入れていた教師がいて、その教師達がアドバイザーとなり、他の教師と相談しながら進めています。ベテランの教師たちに対して体育教師が助言するとなれば敬遠されてしまうこともあるため、あくまでも教科に身体活動を取り入れるためのサポートとして慎重に進めてきました。現在は、担当教員同士の対話が生まれることにも繋がりが、この点については高く評価しています。また、授業に身体活動を取り入れることでの効果が教師たちに定着してきたと思います。

柴田：高学年に関しては、現在も運動量が少ないことに対して、国や団体は警鐘を鳴らしていると思いますが、その点に関しては何か特別な取り組みはありますか？

モーテンセン氏：この問題は学校と保護者の両方に責任があると考えています。特に高学年になると座りがちで運動量が少なくなります。対策として、スポーツクラブに行かない子どもへの啓発を行っています。例えば、3年生から5年生の子どもに対して学校が費用を負担し、地域の陸上クラブと協力して12週間の体験教室に参加する機会を提供しました。また、秋休みのオープンスクールでは、スポーツクラブや団体、企業が協力してジョギングのイベントを行っています。デンマークでは、地域のスポーツクラブや団体との連携を強化しながらスポーツや身体活動の普及を進めています。



図44. モーテンセン氏と筆者

4. 考察

本稿では、デンマークの2つの国民学校における教育改革後の体育及び身体活動に関する実践を取り上げてきた。そこで、本稿で取り上げた実践が改革の中で、どの項目に該当するのか、また改革を推進するためにどのような取り組みがなされてきたのかについて考察を加えたい。

デンマーク子ども教育省は、教育全般にわたる知識と優れた実践の普及を強化し、教師の実践を促進するために学習ポータルサイト「エミュ」(emu)⁽¹³⁾を運営している。この学習ポータ

ルサイトでは、教育改革における情報が詳細に掲載され、本稿で取り上げた多様な教育 (Varieret undervisning) に関しては、「身体活動」(Bevægelse)、「オープンスクール」(Åben skole)、「自習への支援と学問の探求」(Lektiehjælp og faglig fordybelse)の3つの柱で構成されている。それぞれのページでは制度と枠組み、アクティビティや参考文献などが掲載されている。例えば、「自習への支援と学問の探求」に関しては、生徒の自習を促し、学びを深める時間と学習支援を行うとある。本稿における調査と照らし合わせてみると、ノア・フェレ国民学校における学習センターでの宿題カフェなどの取り組みがこれに該当する。「オープンス



図45. BIUモデルの冊子

クール」に関しては、学校は地域コミュニティ、音楽学校、ビジネスコミュニティ、スポーツ協会、地元の赤十字、企業または文化機関と協力してオープンスクールを行わなければならないとある。同学校の秋休みに実施されていたジョギングのイベントがこれに該当する。「身体活動」に関しては、身体活動は授業中に変化を生み出すのに役立ち、生徒の学習、健康、幸福を支えるとある。制度と枠組みとして、すべての学年でスポーツと身体活動は、毎日平均約45分間程度含まれる必要があり、その目的は子どもや若者の健康を促進し、各教科での動機付けと学習を支援することとある。この身体活動に関しては、制度や枠組みを具現化し、学校教育に定着させるため、子どもと青少年の栄養、運動、健康に関する専門機関である「コスモス」(KOSMOS, nationalt videnscenter)が「教育に統合された身体活動」の推奨を目的に「BIUモデル」⁽¹⁴⁾を開発し提供している(図45)。このモデルは主に5つの柱で構成されている。直訳すると「指導の構造化」(Strukturering af undervisningen)、「遊び心のある活動」(Legende aktiviteter)⁽¹⁵⁾、「学習内容の身体化」(Kropsliggørelse af det faglige indhold)、「環境や状況に応じた応用」(Situert anvendelse)、「創造的かつ美的な学習活動」(Kreative og æstetiske læringsaktiviteter)の5つである。「遊び心のある活動」を本調査に照らし合わせてみると、今回視察した2つの国民学校に共通して屋外にフレームがプリントされていたが、こうしたフレームを活用しながら身体活動を伴う遊びを取り入れた数学や国語などの授業がこれに該当する。また、「学習内容の身体化」に関しては、アスゴー国民学校の1年生で実施されていた国語の授業における身体活動を伴う遊びがこれに該当する。「環境や状況に応じた応用」に関しては、ノア・フェレ国民学校で確認したQRコードを活用したオリエンテーションを取り入れた生物や社会の授業がこれに該当する。「創造的かつ美的な学習活動」に関しては、今回の視察で見ることができなかったが、ダンスや演劇などの身体表現がこれに該当し、歴史教育における戦や社会学における金融の交渉を扱うロールプレイなどがこれに該当する。さらに、改革後の体育と身体活動における取り組みを充実させるため、さまざまな企業や団体が教師や児童

へ情報提供を行っている。その中でも、南デンマーク大学 (Syddansk Universitet) が中心となって展開している研究プロジェクト「学校における福祉と運動」(Trivsel og Bevægelse i Skolen)⁽¹⁶⁾では、様々なアクティビティの開発や研究成果の提供が行われている。このプロジェクトは、成功体験 (Succesoplevelser)、共創 (Medskabelse)、コミュニティ (Fællesskab) の3つの基本原則に基づき、次の3つの項目から構成されている。その内容は、「体育」(Idrætsundervisning)、「ブレイン・ブレイクス」(brain breaks)、「休み時間」(Frikvarteret) の3つである。「体育」に関しては、教授内容や具体的な種目の展開方法がカタログ化 (図46) され、誰でもダウンロードすることができるようになっている。また、動画ではアクティビティの特徴やねらいなども解説されている。「ブレイン・ブレイクス」は新しい概念であり、座りがちな授業の中で、一旦脳を休息させ、身体活動を通して心拍数を上げることでその後の集中力が向上するという研究成果⁽¹⁷⁾を活かし、授業の中に積極的に身体活動を取り入れようとするものである。体育同様に動画とカタログ化 (図47) されて情報提供が行われている。デンマークの一般的な科目において一時的に取り入れられる身体活動は、このブレイン・ブレイクスとして共通理解されている。アスゴー国民学校の5年生の歴史の授業や1年生の国語の授業で実施された活動や遊びは、まさにブレイン・ブレイクスに該当するもので、エムボー氏による授業の説明でも頻繁にこの概念が使われていた。「休み時間」に関しては、屋外での遊びを積極的に行うための情報やアクティビティが紹介 (図48) され、児童自ら行動を計画するためのシートなどもダウンロードすることができる。

その他の研究成果も雑誌MOV:E (図49) に掲載され、同ホームページからオンラインで誰でも見ることができるようになっている。また、今回の改革では学校や教師を対象とした取り組みだけでなく、直接児童へ働きかけるものも多数確認することができた。例えば各教室には身体活動を促すポスターが掲示され、体ほぐし運動のような協働的な動き (図50) や基本的な動作 (図51) が示されており、トリグ基金 (The Tryg Foundation) から助成を受けたいくつかの団体が共同開発し発行している。図52は、デンマーク学校スポーツ (Dansk Skoleidræt) が月毎に配布しているポスターであり、iPadを活用してQRコードを読み取ると、ダンスやスポーツに加え、動きの課題を動画で読み取ることができる。その動画に従って実施できれば、児童がシールを貼っていくというICTを活用した実践である。

本稿では、デンマークにおける国民学校の視察とインタビュー調査から、改革後における体育と身体活動に関する新たな取り組みやその成果について検証してきたのだが、この改革を推進させるために子ども教育省をはじめとして、様々な団体や企業、研究プロジェクトが現場の教師に対して具体的な情報を提供し、総体的にサポートしてきたことが見えてきた。



図46. 技能

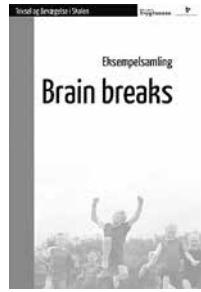


図47. 脳の休息



図48. 休み時間の活動



図49. 雑誌MOV:E

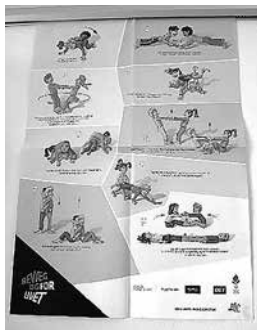


図50. 協働運動のポスター



図51. 基本動作のポスター



図52. iPadを活用した動画の提供

5. まとめと今後の課題

本稿では、2014年に実施されたデンマークの教育改革により、体育・身体活動の実践にどのような変容がもたらされたのかを探るため、2つの国民学校での実践調査を実施した。現地視察とインタビュー調査から次の点が確認された。第1に、児童のモチベーションを高めるためにクラス合同で体育の授業を実施する、卒業試験に体育が組み込まれるなど、以前にもまして体育の授業における質的向上を図っていることが確認された。第2に、体育以外の一般的な教科においても意図的に運動や身体活動を取り入れていることが確認された。第3に、この一般的な教科における身体活動は、研究成果に裏付けられた取り組みであり、ブレイン・ブレイクス (brain breaks) と呼ばれる新たな概念であることがわかった。第4に、2つの学校に共通して屋外環境を活用して授業を展開し、休み時間に児童を屋外へ促す取り組みなどが実践され、こうした屋外での活動は身体活動時間を保証するだけでなく、児童の学習意欲を高めることにも貢献し、教科を横断的に展開することにも繋がっていることが確認された。第5に、改革を推進させるために様々な団体や企業、研究プロジェクトが教材やアクティビティを開発し、現場の教師をサポートしていることが確認された。

こうした改革後の実践を丁寧に見てみると、教育改革によって義務化された身体活動は、決して強制的な取り組みではなく、むしろ児童のモチベーションを高めながら学習成果の向上を目指したものであり、同時に健康面や幸福感にも貢献していることが見えてきた。また、現場の教師たちが試行錯誤を繰り返す中で、実践が成熟してきたこともうかがえた。このことは、二人の体育教師に共通して「児童の身体活動や外遊びの質が向上したという実感を持っている」というインタビュー結果からも明らかである。勿論、本稿で得られた事例によりデンマークにおける一般的な見解とみなすのは尚早であろう。そこで、今後は本研究で明らかになった結果をさらに検証するとともに、国民学校のみならずデンマーク全体の体育・身体活動の潮流を追うことで、我が国の体育・身体活動を取り巻く議論への示唆を得たい。

【註】

- (1) デンマーク政府子ども教育省のホームページによると、教育の共通目標の中に、すべての科目にはITとメディア、言語開発とイノベーション、起業家精神という3つの横断的分野が含まれるとある。詳細はデンマーク政府子ども教育省web参照。

<https://www.uvm.dk/folkeskolen/fag-timetal-og-overgange/faelles-maal/om-faelles-maal> (最終確認：2019年9月16日)。また、スウェーデンにおける起業家精神教育に関しては、川崎一彦、澤野由紀子、鈴木賢志、西浦和樹、他著『みんなの教育 スウェーデンの「人を育てる」国家戦略』(2018)、ミツイパブリッシング、参照。

- (2) 谷雅泰、青木真理編著、柴田卓、他著、『転換期と向き合うデンマークの教育』(2017)、ひとなる書房、32頁、参照。

- (3) 2014年の改革を進める目的および結果目標に関しては、谷(2014)で報告されており、以下にその一部を紹介する。

改革を進める目的は、次の簡潔な3点に集約されている。1) 国民学校はすべての生徒がその潜在能力を発揮できるように課題に取り組まなければならない。2) 国民学校は学習面の結果に対する社会背景の影響を少なくしなければならない。3) 国民学校の専門的知識と実践への敬意を通して、学校の信頼と生徒の幸福が強められなければならない。

この目標を達成するための計測可能な「結果目標」は次の4点である。

- ・少なくとも80%の生徒がナショナルテストの読解と数学でよい点数をとる。
- ・デンマーク語と数学のよい成績を上げる生徒の数が年々増加する。
- ・ナショナルテストで読解と数学でよくない結果の生徒が年々減少する。
- ・生徒の幸福(well-being)がまずことの4つである。

谷雅泰(2014)、「中道左派政権によるデンマークの教育改革—よりよい国民学校をめざす方策の提案—」、福島大学人間発達文化学類論集(19) 27-40頁。

- (4) デンマークにおけるPISAショック後の取り組みに関しては、佐藤(2016)で報告されており、以下にその一部を紹介する。

2003年にデンマーク教育省は、「共通目標(Fælles Mål)」という、各科目に関して2学年ごとの

到達目標や推奨される指導のガイドラインを導入した。2006年には1学年から3学年でのデンマーク語の授業時間数の増加、ナショナルテストの導入、国民学校の修了試験の義務化、2007年には修了試験にデンマーク語「読解」の追加、2008年の就学前クラス(0年生)の義務化、合わせて就学前クラスでの言語能力検査の義務化と続く。2009年に「共通目標」の再検討が行われ、読解、数学、自然科学、英語の強化、また「共通目標」の位置づけが「推奨」から「遵守」する位置づけへと変更された。そして2010年には1学年から3学年の一日あたり最大時限数が、6時限から7時限へと増加した。

佐藤裕紀(2016)、「デンマークの教育政策動向(内外の教育政策動向2015)」, 日本教育政策学会年報, 第23号, 214-221頁。

- (5) 改革に伴う授業時間の改訂に関する詳細は、下記論文を参照されたい。

谷雅泰, 「デンマークの教育改革—2014年の国民学校法改正と2015年の職業教育改革—」(2016), 福島大学人間発達文化学類論集(22) 53-63頁。

- (6) 補足的授業の目的に関しては、註(5) 55頁よりその一部を以下に提示する。

「補足的授業の目的は、国民学校で学ぶ教科の授業および必修テーマと直接的な結びつきを持つ学習活動、または生徒の学習促進、社会的能力の育成、全面的発達、モチベーションと発育等を促すこととする」

- (7) デンマーク学校スポーツ(Dansk Skoleidræt)は、1946年に設立された非営利組織であり、学校のすべての生徒のスポーツ、遊び、運動を通して、健康、学習、幸福を促進することを目標に掲げた全国的なスポーツ組織である。ホームページには「身体活動が学習に及ぼす影響」(Bevægelses effekt på læring)について詳細に掲載され、研究結果やアクティビティの冊子をダウンロードすることができる。アスゴー国民学校でも、この冊子で紹介されていた児童向けの運動教材(図52)を採用している。

<https://skoleidræt.dk/viden-om/bevaegelses-effekt-paa-laering/> (最終確認: 2019年9月16日)。

- (8) 世界保健機構(WHO)は、5~17歳の子どもと青少年に対し、次の3つを推奨している。

- ・ 中程度から激しい強度の身体活動を毎日少なくとも60分間行う必要があります。
- ・ 毎日60分を超える量の身体活動は、追加の健康上の利益を提供します。
- ・ 少なくとも週に3回、筋肉と骨を強化する活動を含める必要があります。

詳細は、世界保健機構ホームページ参照。

<https://www.who.int/news-room/fact-sheets/detail/physical-activity>, (最終確認: 2019年9月16日)。

- (9) デンマーク国立健康管理局(Sundhedsstyrelsen)は、11歳から15歳までの身体活動などに関する調査を実施し、その結果をホームページに掲載している。「Fysisk aktivitet og stillesiddende adfærd blandt 11-15-årige National monitorering med objektive malinger」に関する詳細は、ホームページ参照。

<https://www.sst.dk/da/Udgivelser/2019/Fysisk-aktivitet-og-stillesiddende-adfaerd-blandt-11-15-aarige>, (最終確認: 2019年9月16日)。

- (10) デンマーク国立評価機関(EVA)は、デンマークでの教育や保育における学習の質を保証し、発展させることを目的とする独立した政府機関である。詳細はホームページ参照。 <https://www.eva.dk/>, (最終確認: 2019年9月16日)。

- (11) EVA (2014), 「Inspirationskatalog - Fra skole til skole」, ISBN : (www) 978-87-7958-743-4
<https://www.eva.dk/grundskole/inspirationskatalog-skole-skole>, (最終確認：2019年9月16日).
- (12) 0学年から3学年の生徒は、2014年の改革から最低1000時間のカリキュラムを受ける必要があったが、新たな規定により週に2時間15分(3時間分)が短縮されることになった。これに加えて、市町村にはさらに短縮する権限が与えられた。詳細は次のホームページを参照されたい。デンマーク政府子ども教育省ホームページ,
<https://www.uvm.dk/folkeskolen/fag-timetal-og-overgange/afkortning-af-skoledagens-laengde>,
(最終確認：2019年9月16日).
- (13) デンマーク政府子ども教育省の学習ポータルサイトであるエミュ(emu.dk)から、改革後の体育および身体活動に関する詳細な情報を得ることができる。特にテーマ「多様な指導」(Varieret undervisning)には、本調査で実践されていた取り組みを裏付ける情報が掲載されている。詳細はホームページ参照。
<https://emu.dk/grundskole/varieret-undervisning>, (最終確認：2019年9月16日).
- (14) KOSMOS, nationalt videnscenter, 「学校教育に統合された身体活動」(Bevægelse integreret i undervisningen i udskoling)に関する「BIUモデル」, 詳細はホームページ参照。
<https://emu.dk/sites/default/files/2019-01/Didaktisk%20plakat%20bev%C3%A6gelse%20integreret%20i%20undervisningen%20i%20udskoling.pdf>, (最終確認：2019年9月16日).
- (15) 「遊び心のある活動」に関しては、LEGPÅ STREGのホームページでフレームを活用したアクティビティが多数紹介されている。詳細はホームページ参照。
<https://www.cancer.dk/legpaastreg/>, (最終確認：2019年9月16日).
- (16) 「学校における福祉と運動」(Trivsel og Bevægelse i Skolen), このプロジェクトに関する詳細は、次のホームページ参照。
<http://xn--trivselogbevægelse-2rb.dk/>, (最終確認：2019年9月16日).
- (17) ブレイン・ブレイクスに関しては以下の文献を参照された。
Smedegaard, S. (2018) .Implementering af en skolebaseret intervention til fremme af børn og unges trivsel og bevægelse : Udvikling, implementering og procesevaluering af ”Trivsel og Bevægelse i Skolen”. Institut for Idræt og Biomekanik, Syddansk Universitet. など.